



まるお

<道しるべ その3>
太平洋戦争時の日本の連合艦隊
司令官『山本五十六』の
ことば
『してみせて、言ってみせて
聞かせて、ほめてやらね
ば人は動かじ』

<学校教育目標>
自ら学び 自他を尊重し
心豊かでたくましい生徒の育成
<重点目標(スローガン)>
感謝+優しさ=笑顔と幸せへの道
発行：長崎県立丸尾中学校
文責：校長 川口 猛
令和8年6月1日(月) NO5

6月=『水無月』、初夏です。

新年度が始まって、2か月。季節は初夏です。同時に、梅雨の時期です。長崎は、雨が似合う街でもあります。保護者の方々はギリギリご存じでしょうが、『長崎は今日も雨だった』という歌謡曲も大ヒットしたくらいですし、この時期の長崎にマッチするのが、『あじさい』ですね。

さて、長崎の雨の良さを述べましたが、一般的に雨というとカラッとせず、ジメジメしたイメージだと思います。湿度も高くなり、気温は上昇するので、不快指数が高くなり、気持ちよくないものです。このような外的要因で、気分もすっきりせず、ストレス発散しようにも、雨でできないという時期でもあります。心の中がもやもやしている時期です。

梅雨は雨がずっと続きます。その雨は、雲から降ってきますから、梅雨の時期は、日照時間が変わる時期になります。その結果体内の『セロトニン』の合成がうまくできず、分泌量減り、その結果、“うつ状態”を経験する人が散見される季節だそうです。さらに、セロトニンは、安心感をもたらすホルモンで、『セロトニン不足』は不安を招くだけでなく、暴力性を高め、過激な行動をとるなど、悪い結果になることを承知しつつも、それをやめられない“衝動性”を招くとも指摘されています。ある全国のある都市で行われた調査では、『からかわれたり、悪口や脅し、文句、いやなことを言われたりした』『仲間はずしにされたり、無視されたり、陰で悪口をいわれたりした』などの行為を、「特に強くされた時期」を聞くと、高い割合を示すのが、1学期の6月、2学期の11月、3学期の2月だそうです。さらに、「誰からされたか？」の問いに「同じクラスの男子」、や「同じクラスの女子」と回答が増加しているそうです。学級における人間関係のトラブルがおこる割合が高くなっていることを意味しています。新年度が始まって、新しい志をたて、まい進してきた生徒たちは、上記のような「天気」「天気によるセロトニンの分泌減少」

そして、次第に教職員の外勤(会議)により多忙を極めていく時期であり、子どもたちの高いパフォーマンス力が落ちていく時期ともいえるのです。子どもたちが不安定になる時期というのは、潜在的に存在し、いじめや問題行動、人間関係のトラブルによる集団の質の低下のリスクが高まっていく時期のが、この6月です。6月だけではなく、その前後の5月末や7月も同じ傾向を示しているように感じるこの頃です。

本校では、5月の下旬から教育相談を実施して、生徒の心の不安は這う安定さの解消や傾聴することで悩みを引き出したり、様々なトラブルやいじめが出てきたら、その解決のための手立てを講じたりいたします。

幸いにも、中学校は、教科担任制なので、生徒は多くの先生とともに生活していますから、自分が話しやすい先生に相談することもよいでしょう。私たち教職員も、気を張りながらも、傾聴する姿勢をわすれず、対応していきたい時期が、6・7・11・2月の時期です。

6月末には、県下一斉に『長崎っ子の心を見つめる教育週間』が実施されます。本校も、『丸尾っ子の心を見つめる教育週間』が行われます。この期間に、改めて、『命の大切さ・尊さ』を知る週間が準備されています。子どもたちに、学校・保護者・地域が寄り添いながら、生徒を支えていく期間になっていくことを願ってやみません。『子どもを中心に据えた』取組を推進していかなければ、長崎市の『だれ一人取り残さない』達成できません。手を携えながら頑張っていきたいものです。

時と場所、状況がどのような場合でも、そして、所属する集団がどのような集団であっても、接する相手がだれであっても、判断基準は変わらない。

我々の行動の判断基準は、『楽しいか、楽しくないかで判断するのではなく、正しいか、正しくないかで判断をする。』

青山学院大学駅伝競走部の監督 原 晋さんの言葉から

「監督から、『あしろ、こうしろ』と言われてやっても意味がない。自分たちで自発的に目標を定めて『やる！』と言わないと、モチベーションにつながらない。」

箱根駅伝という大会がお正月にあるのを知っている人も多いと思います。青山学院大学は、今年も他の大学を大きく引き離して優勝しましたが、この箱根駅伝の常勝チームの監督が「原 晋」さんです。原さんは、陸上競技の経験者でもあります。大学卒業後に、「中国電力」という会社に就職をし、営業マンとして活躍をしていたそうです。しかし、その電力会社を退社し、青山学院大学の監督に就任しました。就任5年目に箱根駅伝への出場を実現させました。青山学院大学の黄金時代を創り上げた原監督の指導方法は、**選手自身のやる気を引き出すこと**。箱根を走る5区を任せる選手に対して、「国民的ヒーローになれるぞ」と言っただけをかけたこともあるそうです。

この原監督の言葉は、私たち自身を振り返るときに有益な言葉だと私は考えています。

<選手即ち、生徒の立場で考えたとき>

○自分がたてた目標に対して、自ら進んで達成しようと努力を続けているか。

○今年のお正月や今年度の初めの4月にたてた目標を実現するにあたって、自分のモチベーションは下がっていないか。

○「言われてから行う。または、言われても行わない」になっていないか。

強い選手になるには、『自主性、自発性』が大事であり、言われて、嫌気を抱えたまま行っても成功にはつながらないということを示していると考えます。保護者の皆さんは、上記の話を見て、『ある、ある・・・』と感じる方も多いのではないのでしょうか。私も、わが子を相手に、「勉強しろ、○○はしたのか？何ばしょっとか！」と言ひ、わが子は、『わかつとるし！せつかくしようと思っただのにやる気の失せた！』と反発してけんかになることもありました。

親の諭し方というのも、時代の変化に伴い変化していくべきなのかもしれません。本人のやる気を引き出す方法は個々に応じて異なりますし、それが分かれば、子育ても苦労はしないわけですが、なかなかこれが見つからないというのが実情だと思います。ただ、昭和の世代、昭和を引きづっていた頃の平成の時代とは異なる、令和の時代の子どもや若い世代の人たちのやる気を喚起する方法を私なりにですが考えてみました。それは、『**自己肯定感**』や『**自尊感情**』を大切に**した方法ではないかな**と考えています。しかし、**時代が変わろうとも不易のものもある**と思いますし、また、以下のように考えを整理してみました。

- ①指摘すべきことは、きちんと指摘する。(その指摘の方法に一工夫する)
- ②感情的になって伝えるのではなく、冷静に伝える。
- ③否定的伝え方と肯定的な伝え方のどちらの方が効果があるかを、家庭での様子を見ながら判断し、できれば、若い世代が慣れている肯定的な伝え方をケースバイケースで実行することです。**原監督のレース中の選手への声のかけ方を見てみると、選手の様子をしっかりと見て、状況を把握し、受け止めながら、肯定的な話し方をし、選手のモチベーションを上げています。**しかし、これが、簡単にできければ苦労はしないのですが、本人の良さを引き出しながら、対応していくことしかないと考えます。
- ④情報機器(スマホ、タブレットなど)の使用制限を家庭内でルール化する。
- ⑤『いただきます』『ごちそうさま』**感謝の気持ち**を大事にし、何事も当たり前だとは思わないように語ること。

個人情報保護法による個人の特定ができないようにする意味から、また、イラストも勝手に使用すると著作権の侵害にあたることから、使用したとしてもぼかした写真です。結果的に、人物ではない写真(生徒の作品など)やぼかした写真にならざるを得ません。今回も文章ばかりで、読む楽しさはなかったと思いますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。